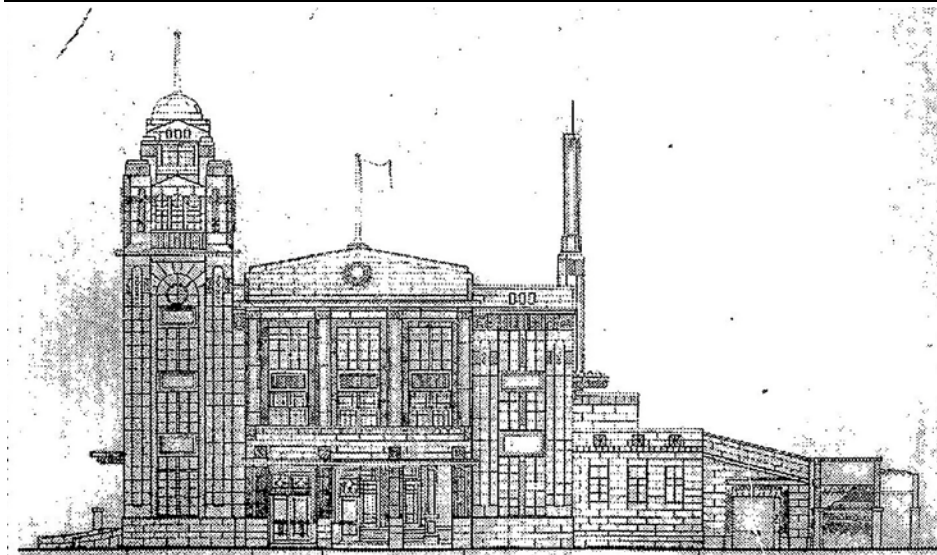


長岡あーかいぶす 第 13 号

編集・発行／長岡市立中央図書館文書資料室



「長岡市公会堂設計」

(「北越新報」大正 14 年
6 月 5 日付記事)

※ 設計案は三種あり、そのうち左図の案を採用。
椰野透は各地の公会堂を視察し、長岡市公会堂には、履物の汚れが落ちるよう工夫された「滑り階段」等、最新の設備を各種とり入れました。

文書の虫

～「北越新報」に見る公会堂の歴史～

長岡市公会堂は、表町で旅館業を営む大野甚松の寄附により、宝田公園内に建設されました。

大正 14 年 (1925) 7 月に工事が始まり、翌年 7 月に完成。8 月 8 日には、千余名の来賓を招いて盛大な竣工式が挙行されました。当時の新聞「北越新報」(明治 40 年 (1907) 創刊、本社は長岡市)は、華やかな竣工式の様子を詳細に伝えています。

それだけでなく、建設に先立つ大野氏の寄附の申し出から、設計者の決定、設計図、地鎮祭や上棟式の様子、工事の進捗状況や公会堂使用条例の決定まで、公会堂関連記事が順次掲載されており、市民の関心も高かったようです。

公会堂の設計者・椰野透は、長岡病院(長岡赤十字病院)初代院長・椰野直の長男です。アメリカへ渡り、建築の勉強をしたといわれていますが、建築家としての透に関する資料はほとんど残っていません。しかし上掲の記事の中に、設計図と、透自身が語る公会堂内部の説明を読むことができ

ます。また「その完成を見たら付近一帯の地に一層美観を添えやうと期待されて居る」とも書かれていることから、多くの市民が「文化の殿堂」の完成を待ち望んでいたことがわかります。開館と同時に音楽会や美術展覧会、講演会、各種会合などが随時開催され、連日多くの人でにぎわい、広く市民に親しまれていました。

昭和 10 年 (1935) 8 月 20 日の同紙に、次のような長岡市会開催の記事が掲載されました。「公会堂の天井及び屋根張り替えの為め二千二百十九円を追加し、三千七百十九円を以て改修を可決」開館から 10 年が経ち、雨漏りするようになったため、改修することが決まったのです。雨漏りの箇所は日に日に増えていき、同年 10 月 20 日付記事では、1 階の食堂までも漏るようになり、関係者が「大騒ぎを演じた」と報じています。

この雨漏りが原因で、その象徴ともいえるドーム型の塔の屋根が形を変えることになりました。さらに 10 年後、昭和 20 年 8 月 1 日の長岡空襲で内部を焼失。復旧工事を経てまた形を変え、戦後は公民館を併設して利用されることになりました。その姿を、今でも記憶の中に留めている方も多いのではないのでしょうか。

(桜井奈穂子)

災害と文書資料室(8)

災害アーカイブの現状と課題

災害アーカイブの広がり

文書資料室では、平成 16 年 10 月 23 日の中越大震災発生以降、7・13 水害、中越沖地震も含めた災害記録の収集・保存を行ってきました。これらの災害アーカイブ資料は、①長岡市立中央図書館文書資料室収集資料、②長岡市内避難所資料、③長岡市役所資料、④長岡市内小・中・高等学校・特別支援学校資料、⑤新聞資料、⑥行政刊行資料、⑦図書資料、⑧地図資料、⑨写真資料、⑩長岡市内コミュニティセンター資料に分類し、整理が終わった 9,651 点を公開しています。

さらに、平成 23 年 3 月 11 日以降は、長岡市内に開設された東日本大震災避難所資料を収集。地震・津波・原発事故の被災地で様々な史料保存の取り組みが続く中、震源から遠隔地に所在する当室のような歴史資料の保存機関が、どのような役割を果たすことができるのかを検討した結果、実施したものです。現在、公開に向けて整理作業を行っています。

東日本大震災避難所資料の保全

掲示物・配布チラシや事務文書など、避難所にある文書資料は、使用后や閉鎖時に随時廃棄されていきます。そのため、調査・収集は平成 23 年 4 月から 6 月までの避難所開設期間中に実施しました。一般避難所、南相馬市避難者避難所（原発事故による）、福祉避難所（介護が必要な人・妊婦・乳児など災害弱者をサポート）の内 8 か所の避難所をのべ 27 回訪問。ダンボール箱 44 箱分、封筒 11 包分、写真 393 枚の東日本大震災避難所資料を保全することができました（内訳は下表を参照）。

一般避難所	箱	封筒	写真
高齢者センターみやうち	4	2	49
皆楽荘（栃尾地域）	2	1	49
夕映荘（寺泊地域）	1	0	0
志保の里荘（与板地域）	1	0	0
新産体育館	6	1	81
南相馬市避難者避難所	箱	封筒	写真
南部体育館	11	4	102
北部体育館	12	1	64
福祉避難所	箱	封筒	写真
長岡ロングライフセンター	7	2	48



▲長岡市資料整理ボランティアによる東日本大震災避難所資料の整理（於 まちなかキャンパス長岡）

新聞資料の精査

今年度から災害アーカイブ資料として保管する新聞資料の精査を開始しました。これまで、平成 16 年 7 月 13 日の 7・13 水害以降の主な新聞の原紙を全紙（全ページ）保管してきました。今後は「新潟日報」「長岡新聞」のみを全紙保存し、平成 20 年 4 月以降の全国紙は地方欄のみを保存することにしました。保管場所の確保が主な理由ですが、資料を精査することで、特徴あるアーカイブの構築をめざすという前向きな方向性を見出すことができました。

例えば、「地方欄は全国紙のデジタル化提供の対象になりにくいので、ページ全体を切り抜いて原紙保存する」、「3 月 11・12 日、7 月 13 日、7 月 16 日（中越沖地震）、10 月 23 日の各日付の新聞は、震災・水害から何年目という記事が掲載されるので、今後も毎年全紙保存する」というように、保存の理由・目的を明確化したのです。

今後の課題～中越大震災 10 年に向けて

7・13 水害から東日本大震災に至る文書資料室の災害アーカイブ資料の整理は、長岡市資料整理ボランティア、新潟歴史資料救済ネットワーク（事務局：新潟大学人文学部・矢田俊文研究室）の皆さんの協力も得て行っています。

連続する自然災害を前にして、長岡市の経験を伝承する災害アーカイブの構築は、急務であると考えています。市民参加の整理作業、資料の公開促進による研究機関への情報提供、災害アーカイブ展の開催、資料集の刊行など、中越大震災から 10 年目の来年、平成 26 年度に向けた取り組みの充実は、文書資料室の大きな課題です。

（田中洋史・下玉利紀子・田中祐子）

明治 39 年 (1906) に発行された『日本山嶽志』は、日本初の山岳事典です。この本を編さんした人物が、高頭式 (しょく、仁兵衛) です。

長岡には、「マキ」という同じ先祖を持つ、いわゆる血縁集団を示す言葉があります。「高頭」姓といえば、深才地区を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。実際に、高頭仁兵衛は三島郡深沢村 (長岡市深沢町) の出身です。生家の高頭家本家は江戸時代からの豪農で、代々、「仁兵衛」の名を受け継ぎました。

明治 10 年生まれの仁兵衛は、少年期の弥彦山登山をきっかけに登山を趣味とするようになり、国内各地の山に登り始めました。しかし、明治 29 年に家督を相続し、翌年に結婚すると、母から登山を禁止されてしまいます。そこで、それまでの登山への熱意を山岳研究に注ぎ、全力を傾けたのです。その後、明治 38 年の日本山岳会創立に加わり、昭和 8 年 (1933) には二代目会長、同 10 年には名誉会員となりました。

今日でも山を愛する人たちの座右の書といわれる『日本山嶽志』は、博文館から 3,000 部が自費出版されました。当時の博文館社長は大橋新太郎 (長岡出身の大橋佐平の長男) で、高頭家とは旧知の間柄でした。他にも、大正 9 年 (1920) に『日本太陽暦年表 (上巻)』 (下巻は同 10 年刊行)、大正 14 年に『御国の咄』を刊行しています。その冒頭の「本書を著作いたしました動機から印刷に至りました順序を述べまして自序に代へまする」の中で、自身の生い立ち等を述べるとともに、『日本山嶽志』刊行の理由についても触れています。

「自分の父の義宗が嘗て自分に父が自記いたしました、漢詩文の熟語を集めました備忘録のような本を、式太郎 (自分の幼名) の名義で出版刊行いたそうと申しました事がありましたから、自分は最初に貧乏致しました時に、せめて亡父への申訳にもと存じまして『日本山嶽志』を上梓いたしました」とあるように、そこには山への情熱のみならず、亡き父への思いも込められていたことがわかります。

仁兵衛はまた、郷土の教育や産業の振興に尽力した人でもありました。大正 6 年 11 月、互尊文庫が竣工した際には、1 万 8,800 冊の図書を寄贈しています (開館式は翌年 6 月)。開館当初の蔵書数は 3 万 708 冊でしたので、その半数以上を占めていたということになります。ちなみに、寄贈者は十数人に上り、前述の大橋新太郎もそのうちの一人でした。残念ながら、これらの寄贈図書は昭和 20 年 8 月 1 日の長岡空襲で焼失してしまいました。

東京都品川区にある国文学研究資料館には「越後国三島郡深沢村高頭家文書」が所蔵されています。主に高頭家分家の古文書類などで、長岡の高頭一族について知ることのできる貴重な資料です。「雑学者」といわれた高頭仁兵衛を育んだ郷土の歴史とは、どのようなものだったのでしょうか。この点も、興味深いところです。

(金垣孝二)

【参考文献】

- ・国文学研究資料館『越後国三島郡深沢村高頭家文書目録』平成 10 年
- ・長岡市『ふるさと長岡の人びと』平成 10 年
- ・長岡市『長岡歴史事典』平成 16 年

●文書資料室ホームページ 全面リニューアル!

この秋より、文書資料室ホームページをリニューアルします。現在、着々と準備を進めているところです。

長岡市史双書など文書資料室が編集・発行した各種刊行物の案内や、長岡の歴史に関する相談の受け付け、主催イベントの告知と参加者募集、そして、毎月の活動報告では写真をたくさん取り入れるなど、より詳しく、わかりやすいホームペー

ジになるよう心掛け、コンテンツの充実を目指していきます。ご意見・ご感想などございましたら、何なりとお寄せください。

新ホームページをどうぞご最真に〜♪

(下玉利紀子)

【新アドレス】

<https://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/monjo/index.html>

《新たに公開した所蔵資料一覧》

※ 寄贈・寄託順。保管場所の都合等で当日閲覧できない資料もあります。

閲覧希望の際は、あらかじめ電話等でご確認ください。

三島郡河根川村青柳家文書目録（近世～近代、4,333点、青柳芳雄氏寄贈）

片山家文書（追加）（近代・現代、326点、片山恵美子氏寄贈）

『日本石油史』（近代、1点、太刀川喜三氏寄贈）

「越佐経済新報」他新聞（現代、18点、内山弘氏寄贈）

南蒲原郡横山村坂口家文書（猿橋川揚排水関係文書他）（近世、3点、坂口正吾氏寄贈）

三島郡三島町上岩井安達家文書（追加）（近代・現代、49点、安達香氏寄贈）

古志郡雨池村阿部家文書（追加）（近世・近代、2点、阿部洋子氏寄贈）

福島県田村郡三春町湊家文書（北越戊辰戦争絵図）（近世、2点、湊耕一郎氏寄贈）

遠藤軍平資料（近世、13点、林裕己氏寄贈）

三島郡上富岡村田中家文書（近世～現代、7,782点、田中学氏寄贈）

大島コミュニティセンター資料（信濃川絵図他）

（近世・近代、5点、大島コミュニティセンター寄託）

片山家文書（寄託）（近代・現代、47点、片山恵美子氏寄託）

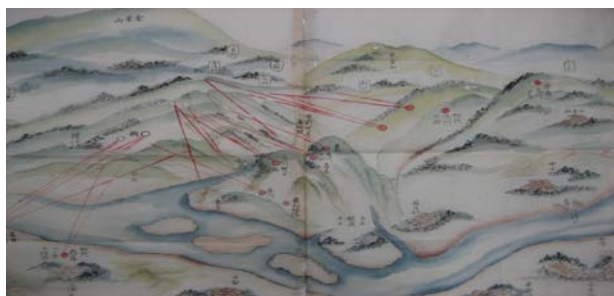
鷹藤家資料（近代・現代、34点、鷹藤洋一氏寄贈）

●資料保存こぼればなし（5）

長岡市ホームページの中に、文書資料室のページがあることをご存知ですか。トップページから「くらし」→「歴史的資料」→「文書資料室の紹介」で、閲覧することができます。

文書資料室の利用案内を掲載しているほか、お持ちの歴史的資料の取り扱い相談を、電子申請サービスで受け付けています。

先日は、初めてこのシステムを利用して、福島県三春町の方から相談がありました。長岡の古地図（北越戊辰戦争絵図）が、なぜかわからないけれど、家に伝わっていたそうです。この古地図は縁あって長岡市に寄贈となりました。



地域や家に伝わる歴史資料（古文書、地図、書籍、写真など）は、かけがえのない財産です。お持ちの資料の取り扱いについて、文書資料室ではいつでも相談（来室・電話・FAX・メールなど）を受け付けています。何かお困りのことがございましたら、お気軽にお問い合わせください。

（石井順子）

【 編集後記 】

今年は相談業務（レファレンス）の件数が多いように感じます。先祖調べ、卒業論文作成、地域・学校の郷土学習、長岡ゆかりの人物など、メール・電話・来室で様々な依頼がきています。文書資料室では、相談業務の内容をスタッフ間で共有・蓄積し、スムーズな対応につなげるよう工夫しています。相談業務は、利用者の皆様と直接お話できる貴重な機会です。市民に身近なアーカイブをめざして、努力と研鑽を続けています。（田中洋史）

小林良子嘱託員が3月末で退職。4月に林朋子・中島晃栄臨時職員、5月には下玉利紀子嘱託員を新たにスタッフに迎え、新年度がスタートしました。例年に無い猛暑日の続く中、「市史双書を読む会」は無事終了、「古文書解説講座」も順調に進んでいます。ほっとする間もなく、後半には公文書整理や市史双書編集作業が控えています。この冬は雪が少ないことを祈りつつ、体調管理に留意し、目の前の仕事を一つ一つクリアしていきたいと思っています。（桜井奈穂子）

平成25年10月1日発行

編集・発行：長岡市立中央図書館文書資料室

スタッフ：石井順子、田中洋史、桜井奈穂子、下玉利紀子、

田中祐子、林朋子、中島晃栄

〒940-0065 新潟県長岡市坂之上町3-1-20

（長岡市立互尊文庫2階）

TEL 0258-36-7832 FAX 0258-37-3754

E-mail: monjo@nct9.ne.jp